



七新藥  
下

431  
3止





武門  
番 49 /  
卷 3止



七新藥下卷目次

第五篇

驅蟲滌腸之藥

珊多尼

珊多尼一凡の功用利害

附録

石榴根皮

第六篇

峻烈麻神鎮瘧之藥



莫非

莫非一凡の功用利害

莫非中毒の救療法

莫非の製劑

○第一 純莫非 ○第二 硫酸莫非 ○第三

塩酸莫非 ○第四 醋酸莫非 ○第五

青酸莫非 ○第六 阿片酸莫非 ○第七

鉍酸莫非

第七篇

緩和滋養疎解之藥

肝油

肝油一凡の功用利害

肝油の製劑  
○肝油燻

七新藥下卷目次終

七新藥

下卷目次

二

尚新堂藏



○ 驅蟲藥  
○ 驅蟲藥

七新藥下卷

佐渡 凌海司馬 虧公 損 著  
河州 侍醫 關寬齋 校

第五篇

驅蟲滌腸之藥

珊多尼 サントニウム の キニユム の キニユム の キニユム の  
アンティヘルミン ティキユム  
驅蟲塩の 神聖塩

珊多尼ハ雪白晶體の塩ホトテ光輝あり之ヲ焚

七新藥 下卷 珊多尼 尚新堂 校



けの青烟と發せ、香臭共小なく。口小入て微苦と  
覺へ、冷水と溶解せと。温湯小も亦溶解し難く。酒  
精及び脂油小の容易小溶解し。光輝小遇ふて黄  
色と變は。故と黒紙と包纏し。瓶中小貯ふへ  
し。カールル<sup>人名</sup>初めて之とセメン。シ子工<sup>驅蟲</sup>の中  
に得たり。邇來之と製して以て醫藥小供と。サシ  
トシを都耳<sup>トルコ</sup>其及び噫<sup>イタリヤ</sup>太利<sup>共名</sup>の語、神聖を稱と。  
此物蟲と驅るの効神の如と。以て、資て之小名  
つくと云ふ。  
珊多尼をセメン。シ子工の一成分なり。膠塩油等

と共に其中小在り。石灰及び酒精と以て之と蒸  
餾する小由て成る。  
セメン。シ子工を百耳<sup>ペルシヤ</sup>西亞及び小亞細亞<sup>共名</sup>小  
産する一種の草樹。アルテミシヤ。コシタラ或を  
アルテミシヤ。フリアナの小花實なり。古來より  
之を驅蟲の良藥として其稱畧廣く。殊小皇國  
小於ける如と。之を驅蟲藥品の長ある者と  
して之を用ひ。從て誤用するとも亦多り。夫れ  
此花實の其驅蟲の功實小良らざる小非と。雖  
とも。ウーストールレン氏之と衝動揮芬の藥劑

新藥 下卷 珊多尼 二 尚新堂藏



小列ぬるゝ如く。其性衝動刺戟して。安小之と投  
をふると得む。且つ又嘔と發せへき一異不佳の  
氣ありて。患者之と嫌惡するも多く。殊又小兒小  
至てハ斷して之を服し得ざる者も亦間これあ  
り。故又諸家先生。各心匠を費して之を爲す簡易  
の良方を求め。或ハ羔膏を作り或ハ錠圓を製し。  
以て其所好小阿ると雖とも。未と一も適功有用  
の製あるを聞て。輒今珊多尼出てより。其量少く  
して其功却て強く。更又兼發の衝動性なく。微味  
無臭小して不辨皂白の小兒も能く之を服せへ

く從前驅蟲小良稱あるの諸藥の如き。莫然と一  
て其名を聞くとふさふ至る。亦吾道の一大快事  
小あらむや。

司馬子曰く。朋百氏謂く。夫れ殺虫の品。今古を  
通それハ其數實小屈指小堪へん。今一珊多尼  
あり。以て他の千百又代るへし。學術の高尚小  
登る。又悦ふ小堪たり。頃歳予日本小客するを  
以て。竊又其地の交易を視る小。セメン。シ子エの定  
苞太と過たり。既又去歳の如き。一次小貿ふる  
肝の量殆んと五萬比小及んと比。而して珊多



尼ハ未々其名を知らざる小似たり。其國人の  
言小曰く。和蘭人の舶載する所の品の太抵是  
を有用の物なり。和蘭人小してセメシ。子工を航  
齋とふと斯の如く其れ多し。吾人正小之を贖  
ふへしと。嗚呼。吾和蘭人の本と貿易の爲小  
て来る。利のある所ハ。業之を勉む。何そ其他を  
顧る小違あらん。日本人の伶俐小して却て此  
等の事理を辨せし。此の無用の劣物小即ち金  
玉を擲つ小至る。惜むへとの甚しきかりと。吾  
人醫生これと聽て實小赧然小堪へし。

珊多尼一凡の功用利害

珊多尼の作用。健康體上小見る。者ハ之を知る  
と詳明からし。故又亦記して以て定規とからし。を  
りらむ。然まとも其平常多發の者を舉げて之を  
謂へし。其症太抵左の如し。

小量及ハ中度の量ハ。之を用ふるも絶て變狀を  
見こしとからし。若し極大量を用ふまハ惡心。嘔吐。  
苦悶。疝痛。を發し。血便を下し。腸焮衝。眩暈。麻痺。搐  
掣。譫妄等の症續々起る。  
ホス子ル。キリムス。ペン。ゲル。共名の輩ハ。唯一二



瓜の珊多尼を以て此般の諸症と發せると見  
と云ふ。然まとも是甚と疑ふへし。若し果して  
然らば是れ其製淨清からしてステリキニ子  
と含みし者からん。

珊多尼ハ腸虫殊小蛔虫と驅逐するの神効あり。  
之と用ひて其病實小腸虫の者ハ、緩急必そ其  
蕩滌を致す。故小病の腸虫小起因せる者小之と  
用ふるのまらに。又他の病症疑似決し難き者  
或ハ原因既小除くと雖ともハ虫ありて其痊癒  
と妨くる者又用ひて其有無と試むへし。實小奏

功確切小して什縻の病症も其用否を商議  
するに及んばと云ふ。又或ハ之と間歇熱小用ひて  
良功ありと云ふ。或ハ發汗劑として用ひて殊効あ  
りと稱す。

用法ハ小兒ハ三瓜至四瓜。大人ハ六瓜至八瓜を  
白糖と和して散として一日小服盡す。或ハ間又甘  
瀨と配するもあり。

方小兒の蛔虫症小用ふ  
珊多尼十二瓜  
白糖一了



右研合一分て六色とかい朝夕各一色を服は  
珊多尼と蓖麻油或へ阿列布油レ和し用ふるを  
頗る良方なりと雖とも時としてハ又効るきこ  
有り。小兒ハ正小之と糖藥又製し以て之を用  
ふへし。

珊多尼の驅蟲の効ハ斯の如く較著小して確實  
かりと雖とも若し腸中小絛虫寸白の存する小  
逢へハ決して之を驅る能はし今之と驗する  
小一盃又珊多尼の溶水と盛り此中又諸種の腸  
虫と投する小蛔虫ハ直ち又死し他の諸虫も又

漸々小死を其死せざる者ハ特リ絛虫のハ遊泳  
依然として更小藥液を畏はし其量と増多する  
も亦然り。故小珊多尼ハ能く諸虫を殺すと雖と  
も特リ絛虫を驅る能はし明なり。嗚呼  
此神聖特一の驅虫の靈藥獨リ絛虫と殺る能  
はざるハ奈何をや。天百能と以て一物小全任を  
ることを欲せざる乎。予正小爰又他の絛虫小神効  
あるの一藥を附載せんとい。石榴根皮即ち是なり。

附録

尚齋堂



石榴根皮

コルテキス、ラーデイキス、ガラナーティ、コルテキス、ラーデイキス、ガラナートリム

石榴樹の其實材。根共ニ藥用ニ供すと雖とも、根皮最も有力とふ。園生の者の野生の者より其功頗る弱く、皇國の産の之と西國の産ニ比せれば其力最も強く、西國園生の新皮にて皇國野生の乾皮ニ當つへし。天比良木と皇國小産せしむる。又醫林の大慶なり。東方諸國殊ニ印度ニ於て之を以て驅虫の家貯藥とふせしより、英咭喇人之を得て以て其成分と分析し、初めて之を絛虫ニ用ひ、邇來其用

漸く廣く、遂に之を以て絛虫の神藥とふ。

石榴根皮の唯絛虫ニ効あり。蓋し其餘の腸虫の効なきニ非んと雖とも、其經驗未だ廣くならず。且つ珊多尼の如き希世の神藥爰ニ在るとあれり。石榴根皮を用ひて他の腸虫を治めんと欲する者又稀なり。

石榴根皮の健康作用の之を知ること明りからむ。蓋し別ニ較著の變革を致すとなく、唯之を大量に用ふれば嘔吐下利腹痛を起し、時として眩暈麻酔等を發するとあり。然るとも其



症二三時ふして消散也。

此根皮の繚虫を驅逐するの全く其用法小関  
也。故ふ之と詳ふせざるへうらに爰ふスべし  
工九氏の用法と舉ぐ。即ち石榴根新鮮の者と  
取り。其皮二匁を削り取り。二匁の水を以て煎  
して一匁とふし。水製蘆會羔十二匁。蜂蜜一匁  
を其中小和勻し。以て之と服せしむ。

此方の其蘆會蜂蜜等の品を合とるる爲ふ。患  
者動もすれい之と嫌惡し。或は其効確切から  
也。故小正小朋百氏の用法と以て最良とるに

也。即ち左の如し。

石榴根新鮮なる者の皮を削り取るを二匁。之  
と一日夜間二匁の清水小浸し置き。文火に煎  
して其液一匁とかるふ至り。放冷して濾過し。  
之と用ひんとする前日。晩飯を喫むるをふく。  
次日早朝空心小乘して其液を三分して其一  
分と服し。後半時毎小一分と服盡して後蓖麻  
油一匁と飲む。而して後床中小安卧をへし。若  
し効ふくんは次日亦之を行ひ。一二回連用を  
なす。斯の如くして効あらざるを殆んと稀



なり。  
萬延元年初春。和蘭の在留領事官動某。及ひ其  
下官後某。共小縲虫の症と患ふ。朋百氏之小石  
榴根皮と右の如く用ひて良効と得たり。後又  
縲虫と患ふる者三人あり。共小此方と用ひて  
之と治む。後來人々能く此法と體して以て其  
經驗と廣むるにあらへ。吾道の闡化日を期し  
て遅つへきあり。

第六篇

峻烈麻神鎮瘧之藥

莫非 モルフェニウム。モルフェウム  
打睡塩。阿片之塩

莫非ハ阿片の一成り。他の諸品と相合して  
共小罌粟汁の中小在り。百分の阿片太約八分の  
莫非と含む。阿片の諸病と神功あるハ蓋し又莫  
非小由るのモ。文化元年 西國紀元千  
八百四年 セルセル子  
ル人創めて之と阿片より分ら得たり。モルヘ。ウ  
スと神の名。人の睡眠と主る。此物大小打睡の性  
功ある小資て以て之小名くと云ふ。



莫非の無色の三尖状にして光輝ある小晶體あり。諸酸と合せざる者ハ千倍の冷水ニ溶解し。熱湯及ハ酒精ハ溶解するも尚多く。脂油。鹼水。灰汁及ハ硫酸。塩酸。硝酸。醋酸等の稀薄しざる者ハ克く溶解し。口ハ入て味甚と苦く。試薬ハ由て灰塩性を見ん。

莫非一凡の功用利害

莫非の性功ハ甚と阿片と相遠らずと雖も。其コレハ小異ふる所以ハ唯左の數件ハあり。曰く莫非ハ阿片の如き興奮衝動の効あるをなく。之を用

ひて心の運営を尤めハ脈搏を増さハ血行を進めハ。又大小便を減却するを少し。然まとも消食器と侵するハ却て阿片より甚しく。大量を用ふれハ動もたまハ下利と發す。

第一 健康作用

以局處小用ひて之と内皮法と合せハ。其部痒痛と發して汗滴流出し。水泡状疹と發して其痛熾くハ如く時としてハ咽喉乾燥し。惡心ありて食氣と失ハ。大便閉止して小便困難とあるをあり。

呂小量四分ハを飲服せれハ既小消食器と侵



其苦味小由て悪心嘔吐と發し、動もそれの下利を發せ、之と内皮法小用ふる者の然らば、其神經症の頭痛、眩暈、昏睡、瞳孔散大等と發し、脈搏の毫も變るるをかく、或の時として遅徐とかり、口、鼻、咽喉、肩背小燐く、如き痒痛と發し、漸次小蔓延して全身痒痛し、遂小皮膚赤色と潮し、水泡状の瘡疹と發し、小便減少して通利困難と成る、是を膀胱及び腹筋の收縮力の減殺する小由る者なり。

**波** 大量及び極大量と用ふれば、其直下小抵觸は

るの部、即ち胃腸の如き、別小患害を生ぜると雖も、神経系統及び生活の妙機、一次に變革し、眼目昏闇して物と見るふと能はざ、眩暈し、瞳孔甚しく縮小し、全身疲倦して昏々睡眠し、或は筋肉戦震し、痙攣搐搦交起り、呼吸困難ふして口吻欬斜角弓反張し、窒息或は卒倒小因て死せ、之と内皮法小用ひ、或は灌腸し、或は之と静脈小注射をるも又同一。

### 第二 醫治功用

**以** 総て神経系統知覺機亢進をるの諸病、顔面痛。



頭痛。胃腕痛。腰痛。不眠。百日咳。經久頑固の咳嗽。嘔吐等。効あり。又苦土マク子と合して酸敗液の劇痛ある者。効あり。

〔呂〕急性關節風濕毒。及び其他器械の缺損。劇痛と兼ぬるの症。瘍瘡。癰瘡。諸潰瘍の劇痛ある者。効あり。

〔波〕諸般の焮衝。間歇性と挾む者。神經の侵掠。甚しくして之を爲す劇痛と發する者。患者虚脱して焮衝あるも。刺絡と施し劇烈の消炎法を行ふへららざる者。莫非と用ふへし。而して又

阿片の如く必と之と怕まはして可ふ。即ち風濕毒。痛風。謀毒。瘰癧等の惡液家。發する諸器の焮衝。梅毒性虹彩焮衝。骨痛關節焮衝。腹膜焮衝。熱。咽喉焮衝。氣管支焮衝。肺勞。肺結節腫。慢性の眼焮衝。膀胱焮衝。中毒。起因せる胃腸の焮衝。腦焮衝の不眠。譫妄。狂燥と兼ぬる者。赤班熱。痘瘡。音癬。瘍様腫等。効あり。

〔仁〕尿道膀胱の痙攣性諸病。産蓐の痙症。咳嗽の經久。冒寒。小由る者。肺勞の咳嗽。甚しき者。窘迫。痢。子宮痙攣。呢逆。舞蹈病。癩癩。産婦の嘔吐。百方鎮むる



と能はさる者。航海の間。嘔吐と發する者。喘息。瘧  
咳及び其性の諸病。諸般の齒痛。耳痛。効あり  
保 百般の精神病。子宮病。鬱憂病。相思病。酒客の震  
惕。譫妄。殊小其諸病。精神揚發して不眠燥乱。之  
小由て患者の虚脱せんことと恐る。者。陰欲熾盛  
よして過むること能はさる者。効あり。  
邊 百般の瘧性諸病。神經系統<sup>イカニ</sup>什<sup>カニ</sup>麼の變狀ありて  
發するや未と疑團と免れさる者。外傷熱。恐水病。  
破傷風。筋肉戰震。又腦背髓の諸病。諸般の神經熱。  
間歇熱。霍乱。痢病等。効あり。

登 龍腦。芫菁。ステリキニイ子等の中毒。解毒劑  
として用ひて効あり。

莫非以上百般の病患。用ひて皆良効ありと  
雖とも。要する小大。抵皆姑息寛解の用あるもの。  
悉く根治の功と望むことふられ。是れ莫非を用ふ  
る一凡の定規あり。而して<sup>ナル</sup>所<sup>ケ</sup>及内皮法を以て  
之を外用。施する。其功大。内用。勝る。小と  
あり。

莫非と内用。小供をさる。其量常。十分。一。至。五  
分。一。と以て始め。小心して漸次。小増加。以て



半匁若くハ二匁小至らんことを要シ。然きとも長服の間、一旦其用と止住せる者ハ、復再ハ少量と以て始むへし。○之と内皮法ハ用ふるよハ、其量少しく大ふるへし。即ち芫菁膏と以て表皮と剥除するの後、莫非六分匁一至半匁と取り、少許の白糖ハ和し其上ハ傳ふ。○内用ハ散、丸、溶劑皆可なり。又之と錠として用ふる者あり。鑛屬諸藥及ハ植性諸藥の鞣質タンニンと含む者と配伍すると禁む。○外用ハ莫非二匁至五匁と脂若くハ油一匁小研和して塗擦の劑とふし用ひ。灌腸劑ハ

脂油若くハ雞子黄ハ莫非四分匁一至一匁と和し用ふ。

莫非中毒の救療法

莫非の消毒藥ハ骨喜コッサイ、龍腦及ハ鞣質タンニンの諸物なり。ウーストールウーストール名人々又之ハ阿摩尼亞アムモニアを加ふ。故小其中毒症ハ逢ハ、速ニ此等の藥を用ひて其毒と分解し、多量の水液と服さしめ、皓礬、胆礬の吐劑を用ひて吐と起さしむへし。胃水節を以てそれハ尤も可なり。若し其毒ハ中ること既ハ多時小して胃腸の激衝と發する者ハ、病學の定則ハ



従て之と療をせし。

### 莫非各般の製劑

夫を莫非の之と單用するに甚と稀なり。通例之と酸を合せられん大に其性効を發揮し且つ用ひ易しと云。今爰に其製劑數品を掲ぐ。

#### 第一

純莫非 モルフィニウム、ヒュリウム、モルヒナ、ヒュラ、モルブ

輒今人之と用ふる者少し。其用ひ易りらざるを爲ふり。

#### 第二

醋酸莫非 モルフィニウム、アセチキウス、アセタス、モルフィニウム、アセタス、モルフィキウス

帶黄灰白の粉末なり。結晶し難し。少く醋酸の氣あり。十七倍の冷水及び温湯。四十四倍の濃精酒に能く溶解し。風を見て其酸の半分を失ひ。溶解を難りらむ。故に之を用ひんと欲せば。一二滴の醋酸を加ふるを要す。

此薬に獨り人多く之を用ひ。以て其良品なるを稱す。蓋し其血管系統に興奮の効を呈せらるるを少ふきと以てなり。内用より八分の一至四分の一



と溶劑丸散錠等小製し。内皮法ふハ四分ハ一至  
三ハと芫菁膏痕と傳ふ。

方

醋酸莫非 一ハ

菩提樹蒼水 三多半

橙花舍利別 一多

右調勻し舐劑として毎食後一茶匕と服す。

醋酸莫非 三ハ

醋酸 四滴

蒸餾水 三多

右調勻し一日小三次宛一次小十滴至二十滴  
と服と

方

醋酸莫非 二ハ

白糖 一了半

右和勻し八裏小分ち一日小一裏と用ひて内  
皮法とふ

方

醋酸莫非 二ハ



豕脂 半斤

右和勻一軟膏とる

第三

硫酸莫非

シユルヲス、モルヲイキユス、モルヲユーム、シユルヲ  
リキユム、シユルヲス、モルヲイニキユス

小尖針狀白色の晶体にして味甚く苦く、水及び  
濃精酒小克く溶解也。

此劑ハ其諸液小溶解し易く、其量少して其功却  
て大なるを爲す。意大利人大小之を稱用也。然る  
とも獨乙人の之を用ふるを斷す。十歳至二十歳  
内用小ハ十六分ハ一至四分ハ一と用ひ。内皮法

小ハ半ハと用ふ。

方

硫酸莫非

二ハ 蒸餾水小溶解するもの

蜀葵根末

半斤

甘草膏 適宜

右研合一三十九を作り。一次小二丸宛。一日二  
回之と服也。

方

硫酸莫非 二ハ

桂露 二了



薄荷油 一滴

右調勻し綿布に蘸し齒痛に施して神効あり。是をレステリ名の稱用する所なり。

方

硫酸莫非 十五分

白鉛末 半分

風茄羔 一匁

阿列布油 適宜

右調和して軟膏とす。痔腫の焮痛甚しき者  
に施用し。グツチン名大効を得たり。故に又之

と名けてグツチン氏治痔膏と云ふ。

第四

塩酸莫非 ヒドロコロラス、モルフィキウス、モルフィ

白色針狀の塩ふり。味甚と苦し。風を見て變せむ。

二十倍の水及び熱湯に溶解し。酒精にも又克く

溶解す。内用ふは八分一乃至四分一と一次の

量とす。内皮法ふは半分一と一日二次と之を

用ひ。漸次ふ増加して二三分一に至る。蓋し此劑は

法蘭西人及び英咭喇人の殊に稱用する所なり。

方



塩酸莫非一ル 蒸餾水小 溶解する者

桂酒一

右調勻し毎夕一二茶匕と服して不眠の症小 良効あり。

方

塩酸莫非一ル

白糖一

右研和し五裏小 分ち。毎夕一裏と薄荷水小 嚥下し。或ハ之と内皮小 傳ふ。

第五

青酸莫非

シアナス、モルフィキウス、モルフェウム、シアナテム、ヒドロシアニキウム、モルフィニウム

第六

阿片酸莫非

モルフェウム、メコニキウム、メコナス、モルフィ

白色無晶の粉末小 かり。冷水小 容易小 溶化小 是れ即ち阿片の本成分小 なり。純莫非と以て阿片酸を飽充小 する小 由て成る。

第七

鉍酸莫非

アンチモニアス、モルフィキウス、モルフィ

以上三品小 亦唯化學の徒勞小 由て人の耳目と新奇小 するの小 決して有用の品小 非小 之と藥



室小供せしめて可なり

第七篇

緩和滋養疎解之藥

肝油 ヲレヒューム、エコリス、アセリ、ヲレヒューム、カヂ、モリヒューム、エテイノリス、アセリ  
 此油ハ石鮨エカ。鱸魚キス。鮫魚サメ。鱈魚タラ。鮪魚アラ等諸般の海魚の肝臓より出る所の者小  
 して。三種の別あり。一と金色肝油と云ひ。二と闇  
 黄肝油と云ひ。三と褐色肝油と云ふ。其之と製せ  
 るや。上件の海魚の肝臓と剪取し。之と寸許小截  
 断して大桶小入き。熱湯と注ぎ。或ハ火力と以て  
 之と温め。其油消々として溶流する者と指取し。



布片を以て瀘過し貯ふ。或は又水と以て煮熬して之と製する者あり。然まとも微火と以て温め製し。或は風小逢ふて自ら溶流する者と最良の品とふ。其製純精からざる者ハ。屢又海獺<sup>カ</sup>鯨魚<sup>ラ</sup>等の油と雜ふるにあり。

第一種金色肝油<sup>アセリ。アルビウム。エコロリス。</sup>を澄清しして金黄色。其氣不快からん。微しく魚臭あり。甚と稀薄からん。味微甘し。て他の魚油の如く。後微しく咽喉と刺戟を。攝氏十七度の温小逢て半に凝固して風中ニ乾燥し。水と加て之と震盪をま

の白色の乳状物とふ。漸次小澄清して遂小水分と相分る。

第二種闇黄肝油<sup>セラレシウム。エコロリス。アセリ。シユテリス。キウム。</sup>を其色前種小比をま。の稍闇く。微赤と帯ひ。其臭も亦強く。味微苦し。て刺戟を。水と加て之と震盪をれ。の灰白色の乳状物とふ。少頃小して相分る。

第三種褐色肝油<sup>アセリ。フエスキウム。エコロリス。</sup>を澄清からん。帯赤闇黒色。明光小透觀をれ。の青黄色とふる。一種固有の不快し。て焚り如き臭氣あり。味苦くして焚り如く。後甚しく咽喉と刺戟を。寒冷小逢



て凝固せし水を加て之と震盪せし、褐色帶黄の乳状物となし、一日と經るの後油分上面小浮ふ。若し之と藏むると久しければ、油分は全く分ると雖も其水尚澄清ならん。

肝油の種類、此の如く數般ありと雖も、醫藥小供とふ者、特り第二種と以て佳かりとを、是れ其胃小堪へ易けき、第一種の如きは頗る服用し易しと雖も其功却て尠かり、又人或は第三種と以て最有功の品とふ者あり、未と其然否を知らざると雖も、其缺乏小逢は、正小之と試む

るし

肝油の能く諸病小偉功と建る所以は、諸家各其論説と一ふせし、或は之と其中含有する所の沃顛の効分より由るとあり、或は之と否らんと、大學者イング氏、肝油と分析して、脂素、醋酸、油酸、塩酸、磷酸、硫酸、沃顛、石灰、苦土、塩、磷、鐵等の其中小在るとと載録し、而して亦肝油の効は沃顛小在るとを稱せり、然まともミルデル名人の大小此説と非とし、且つ沃顛の在否、未と歴然として確指をへうらんと云へり、此の如く諸説紛然として其



可否と判つへうらはと雖も。前後と參互して之を察する。沃顛は是れ必然常在の成分ふあらを唯時小從て隠現するもの。若し沃顛を以て肝油の効分とふさへ。他の沃顛を胎まさるの肝油は毫も其効ふいとせん乎。故小肝油の効分は必を沃顛ふ由るとせよして可ふり。

輒今肝油の褒賞大小高く。賣販も亦甚と多きり故小。泰西諸國の姦商。動もそれ。他の魚油。鯨魚油。松脂。罌粟油。阿列布油等と加て之と質造る者あり。之と試むる小硫酸と以てると最良と

と。其法少許の肝油を厚紙の上小置と。硫酸二三滴と其中心小滴上せられ。肝油忽ち旋轉し。四方に向て浸延し。美艷の紫色を見し。之を攪拌せし。紫赤色とふり。其終り遂小褐色小變は。若し肝油淨清され。其紫色愈強し。質造の者。然らと。阿列布油の質造ふ出る者。硫酸を滴して其色汚灰白色小變し。罌粟油と雜る者。闇黄褐色と見し。他の魚油と混る者。褐色とあり。○福岡侯。濟世好仁の令徳あり。大小肝油の諸病小偉績あると欣慕し。近一二年來其國中。小命して



遍く肝油と作りしめ。博多ふ於て之と精製を其製良善ふして其品清淨かり。舶齋の者と甚と相譲らむ。長崎平戸の醫家諸子も亦自ら之と製して以て醫藥ふ供む。肝油の 皇國ふ其用と廣むるハ實ニ肥筑を以て嗚矢とふ。道と好むと此の如く其き厚し。何そ吾道の聞けさると患へん。○予頃日客遊して平戸ふ寓む。其地甚と魚蝦ふ富めり。其石鮎魚アカの如きハ動もとまハ丈餘の者と得るとあり之と以て肝油と作り諸病ふ試験とふ。其功頗る佳ふ。且つ之と製するの

一方と得たり。即ち生肝と寸截するとかく。其全塊を鐵鍋ふ入き。微火ふ煮熬をふと少頃時。肝面油珠と生むるふ至て之と布袋ふ搾過をれハ。清油滾々として流下し。更ふ泡沫と生ずるとか。手法簡易ふして油と得ると却て多し。大ふ従前の諸法ふ優る。愚者の一得又誣ふへうらさるふ似たり。

西國ふて肝油と醫藥ふ供するハ英咭喇人及ハ獨乙人かり。是より以前北海諸島の人民之と以て家貯藥と。肺勞。尙癩病。瘰癧。痛風等ふ用ひし



と雖も其功用と書ふ筆して之と唱ふる者ハ獨  
乙人<sup>シユン</sup>キ名人<sup>ノ</sup>して。此事文化五年<sup>西國紀元年</sup>千  
八百九十二年  
ハ在リ。遂ニ啖<sup>ク</sup>啗<sup>ク</sup>又傳リ。荷蘭<sup>ノ</sup>及<sup>ビ</sup>。今<sup>ハ</sup>至<sup>ル</sup>  
ハ全<sup>ク</sup>歐羅巴<sup>ノ</sup>ハ傳播<sup>ス</sup>。就中當時これと稱用<sup>ス</sup>。  
と盛<sup>ル</sup>ふる者ハ英<sup>ノ</sup>啖<sup>ク</sup>啗<sup>ク</sup>の諸醫輩<sup>ト</sup>其最<sup>ト</sup>也。故  
ハ龍<sup>ノ</sup>動<sup>ノ</sup>都<sup>ノ</sup>府<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>ふて夥<sup>ク</sup>く肝油<sup>ト</sup>を製<sup>ス</sup>。四方<sup>ノ</sup>ハ賣  
販<sup>ス</sup>して大<sup>ニ</sup>其利<sup>ト</sup>を收<sup>メ</sup>むと云<sup>フ</sup>。

肝油一凡の功用利害

第一 健康作用

肝油ハ本<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>他<sup>ノ</sup>の植性諸油<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>。緩和<sup>シ</sup>滋養

の性<sup>ハ</sup>あると以<sup>テ</sup>。之<sup>ト</sup>健康<sup>ノ</sup>の人<sup>ノ</sup>軀<sup>ノ</sup>ハ用<sup>フ</sup>るも。別  
ハ較<sup>シ</sup>著<sup>ク</sup>の作用<sup>ト</sup>見<sup>エ</sup>るも。唯<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>服<sup>ス</sup>る<sup>ハ</sup>の  
後<sup>ハ</sup>。噫<sup>ク</sup>氣<sup>ノ</sup>敗<sup>レ</sup>魚<sup>ノ</sup>の臭<sup>アリ</sup>。少<sup>シ</sup>く惡<sup>シ</sup>心<sup>ト</sup>。或<sup>ハ</sup>吐<sup>キ</sup>逆<sup>ト</sup>  
發<sup>ス</sup>。然<sup>レ</sup>も是<sup>レ</sup>唯<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>慣<sup>ク</sup>る<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>發<sup>ス</sup>  
の<sup>ト</sup>。既<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>屢<sup>ク</sup>之<sup>ト</sup>用<sup>フ</sup>ハ者<sup>ハ</sup>更<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>の症<sup>ト</sup>發<sup>ス</sup>  
る<sup>ハ</sup>。若<sup>シ</sup>患者<sup>ハ</sup>克<sup>ク</sup>之<sup>ト</sup>慣<sup>ク</sup>る<sup>ハ</sup>。醫<sup>ノ</sup>家<sup>ハ</sup>亦  
持<sup>リ</sup>其人<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>幸福<sup>ナル</sup>の<sup>ト</sup>。醫<sup>ノ</sup>家<sup>ハ</sup>亦  
大<sup>ニ</sup>慶<sup>ム</sup>と云<sup>フ</sup>。○大量<sup>ト</sup>用<sup>フ</sup>る<sup>ハ</sup>嘔<sup>吐</sup>下<sup>利</sup>と  
起<sup>ル</sup>。蒸<sup>ク</sup>氣<sup>ノ</sup>の發<sup>洩</sup>と獎<sup>メ</sup>。小<sup>便</sup>の分<sup>泌</sup>と増<sup>ス</sup>。縱<sup>シ</sup>今  
實<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>効<sup>ハ</sup>も。嘔<sup>吐</sup>惡<sup>心</sup>ハ由<sup>テ</sup>諸<sup>ノ</sup>液<sup>ノ</sup>の分<sup>泌</sup>と

肝油  
七五  
一



奨進をるるふと謂ふへうらひ之と長服をま  
へ、其人多くハ肥厚し、食機増進し、全身魚臭と發  
し、動もをれハ小疹と發をふとあり。

第二 醫治功用

肝油ハ醫藥として其功用頗る大なり。即ち左件  
の諸病ハ用ふ。

以総て百般の諸病其初生より中年ハ至るの間。  
機械の發育ハ障碍あり。或ハ血液少乏ハ由り。或  
ハ養育減少ハ由て發をる者ハ、其身軀と培養し、  
其血質と壯快ふらしむる等の目的と以て之と

用ふ。故ハ癩癧、佝僂病、骨節潰瘍、肺勞、水脈腺、腸間  
膜腺及ハ諸器の癩癧性諸病ハ効あり。就中其人  
弛緩粘滯の質ふれハ其効愈著し。○トムプワ  
人の説ハ謂く、肝油の肺勞ハ効あるハ、蓋し其中  
含有する所の燐質、肺中の酸素と遇て燐酸とな  
るハ由ると。シモン人の説ハ謂く、肝油ハ血輪と  
增多をふの功ありと。兩説未ダ其原く所と知ら  
ず。ベ子ット人の肝油と肺勞に用ふるハ必ダ其  
初期ハ於てハ一と云ハ、ワルセ人の之と其終  
期ハ用ひて却て良功ありと稱す。嘆咭喇のプロ



ムトシ<sup>名地</sup>の大病院にてハ少壯の人。肺勞の素因  
有る者不之と常服せしめて。其病の發生を防く  
と云へり又之を婦人不用ひて月經の閉止と治  
せと云ふ者有り。縱令然らざるも之を獎進せざる  
の効ありと云ふへうらむ。然れとも肺勞瘰癧の  
二病ふ於ける。吾人の識別未と十分明亮の地ふ  
到らざるハ。肝油の此病ふ良功ある所以も亦未  
と定説を得む。

呂 百般の皮膚病。血質不良ふ由る者ハ之と試用  
せへし。就中苔癬。癩樣腫頭瘡。潰瘡。錢癬。乳房及ハ

陰囊の硬結厚大ふ良功あり。又麻痺病。背髓の偏  
曲。初生兒の關節脫臼。虫病。粘液病。出血。眼諸病。諸  
般の肺病。惡液家の飲食不消化。消渴病。内外結膜  
焮衝<sup>風爛</sup>後の瘰癧腫ふ効有り。

波 痛風。風濕毒及ハ二性の關節諸病。神經痛。腰腕  
痛。背髓刺戟。舞蹈病。癲癩等ふ効あり。蓋し肝油の  
克く此般の神經病ふ効あるハ。唯其病單一の神  
經症ふして。他因を挾むとふき者のとからん。○  
西國ふてハ少女の皮膚粗糙ふして。手指敏捷ふ  
らハ紡績ふ障けある者ふ。善く肝油を用ひて。脂



肪と増し腠理と滑澤し、以て事小従ひし。

第三 肝油を用ふへりらざるの症

肝油の他の沃顛、水銀、鉛石、石灰等の諸品、小比を  
まひ其害甚と歎し、雖も亦之を用ふへりらさ  
るの地なきと能ひ、即ち極少の小兒、胃弱の人、  
胃の知覺機極めて敏捷なる者、消食器損傷ある  
者、病を治せんと神速からんと欲する時、肚腹  
多血の人、痢病の流行する時、患者下利と兼ねる  
者、肺勞の患者、咯血と兼ねる者、極めて炎熱の氣  
候等あり、尚且つ患者此藥を服して、胃受容をる

能ひを直らし、之を吐出せざる者、亦之を用ふ  
るべし。然まとも又左の説を奉ずる者あり、曰  
く、患者之を服して直らし、吐出せざる者、是れ其  
胃異常の刺戟に慣きざるあり、正し其吐物と搯  
取して再ひ之を飲ましむべし。之より由て敏捷の  
神経と頑麻し、善く受容をる小兒に至るべし。

用法、半勺至二勺と一日三四次、小用ひ、漸次小  
増加して多量小至る。小兒或は胃神経敏捷なる  
者、小の尚少量を與ふべし。其之を服するや、單味  
寒冷の者と最も良しと云ふ、即ち手と以て鼻孔と



歴へ一次又嚙下して後水醋或は火酒薄荷水等  
と以て口中と洗ひ糖菓桂皮薑根等と咬まじむ  
る。或は之を幾那橙皮等の耐劑を加へ用ふる  
者あり此等の却て服し易らる。○總て肝油は  
其味不佳ふると以て人多く服ふると嫌ふ  
故に諸家勉めて之として服し易らるむるの  
方法と議し或は之を飲劑に製し或は之を以て  
錠圓と造る等。若し汗の心匠を費すと雖も其要と  
得る者歎し唯食後少頃を経て之を用ふるの法  
は悪心を發さふと最も少くと故に之を空心

小服をへりらる止むとかけき又之を臨臥小  
用ふへし。○又人屢肝油小他の諸薬を加へて之  
を用ふる者あり沃顛及び規尼等の如し  
肝油と外用するは二般の目的あり即ち一は局  
處の功を望む一は遠達の効を求む其局處の功  
ある者ハ角膜翳瘰癧腫内外結膜焮衝爛強皮膚  
病風濕毒腰腕痛等の諸病小用ふる者あり其遠  
達の効ハ之と外用して以て内服の効小同し  
らしめ且つ患者とく嫌惡をるとふららむ  
故に上小論する所の諸病小用ひて其稱譽却て



内服小優ると云ふ。○肝油と外用とふ小諸般の法あり。或ハ之と單小皮表小塗擦し。或ハ蠟若クハ脂小和して軟膏とふし。或ハ之小蛋黄及ハ礮砂精と加へて擦劑とふし。或ハ之小蛋黄及ハ水と加へて灌腸劑とふし。或ハ之と浴湯小加へて以て小兒の諸病小用ふ。○トムプソン人名及ハヒンモン人名ハ内用ニ代へて之と肺勞家の胸上小塗擦して効あると稱す。然キとも此の如き擦法ハ屢共室中小不快の臭氣と發し。却て患者と害とるとあり。縱令芬芳の香油と和するも。全く之と

消さるゝと能ハス。○英咭喇人ハ之と軟膏小製し。慢性疹狀腫の痒痛甚しき者。疥癬。癬癩。丹毒様疹。頭瘡。慢性皮疹。凍瘡。火傷等小用ひ。又亞美理駕の諸醫。就中デライト人名ハ之と稱して偉績無比とす。其法ハ則ち肝油二了至半与と脂一与小和とる者小して。或ハ鱈を加へ。或ハ否らん。近時北筑の醫家も亦肝油と以て軟膏と製し。數次經驗とるの後。之を我師小贈れり。其色闇黄小して微臭あり。其功用と書とる小曰く。腸間膜腺の閉塞及ヒ之より發とる諸病ニ効あり。又諸般の皮膚病



小良かりと。○平戸の地方、錢癩タムシ輪ハシと患ふる者甚  
と多し。其因由と熟察をるタムシハ半ハ遺傳ハ係り。半  
ハ風土ハ由る。予屢之ハ肝油と内服外用せしめ  
て良効を得たり。嗚呼之を以て家貯藥とし。法と  
照して之を行ハ。人々得て此醜汚不潔の病患  
と免るへし。惜むへし之を信をる者尠ふことと。  
コストル名人曰く。ウーレ名人謂く。石鮒アカの生肝  
ハ。不佳の氣少くして甚とく悪心と發せし。其  
油の溶流を防ぐる爲ハ。初め先つ熱湯ハ入ま。之  
と寸截して絞搾し。其出つる所の油と取り。苓薯

粉ハ和して之と服を。甚と妙かりと。知らし。患者  
能く之ハ堪ふるヤ否やと。

肝油の製劑

肝油鹼 ガヂ、モリュエ、ラレイ、サボ

肝油鹼ハ嫌惡をへとの臭少きと以て。最も服し  
易しとん。デスカムプス名人ハ。之を以て肝油の製  
劑中最有効の品とせり。肝油六百分。苛性塩八十  
分。清水二十分と以て之と製し。  
此鹼ハ肝油と投をへとの病狀ハ皆得て用ふへ



一、而して其殊小的症とふる者ハ左の諸症あり  
即ち慢性の皮膚病風濕毒性關節焮衝瘰癧性關  
節諸病癱瘓不遂等小良効あり。  
内服ハ之と丸劑小製すると最良と云其法水膠  
少許と以て之と丸し。而して又水膠と衣と云此  
の如くそれハ惡臭全く消去。三ハ至四ハと一丸  
とし。一日小四十九至六十九と服せしむ。外用ハ  
酒精小溶化し。洗滌塗擦の劑とふ。時小或ハ沃  
顛鹹と加ふるあり。  
七新藥下卷畢

增補 改正譯 鍵

廣田憲寬先生補正 全部五冊

和蘭語ト我 邦語ヲ對譯セル舊本即チ譯鍵ト題セル者既ニ世ニ公數セリ然  
リトイヘ凡蘭語ヲ載スル一要約ニ過ギテ初心ニ便ナラス之ヲ注譯マルモ亦彼意  
ヲ盡サル一少カラス學者之ヲ憾ムル一久シクテ今又大ニ其不足ヲ增加シ  
譯語ヲ改正シ且ツ々々其語類ヲ弁表メ增補改正ノ四字ヲ冠ラシメ以テ舊本ニ別  
ツト云フ實ニ此書ト簡便  
ニメ又備レリト謂ツベシ

病學通論

緒方洪菴先生譯述

初篇三冊既刊  
次篇嗣出

事物ノ病ヲ成ス所以ノ理ヨリ諸ノ病因病證ヲ弁晰究定セル書ニモ医家コレヲ熟  
讀セハ百般ノ病理判然トメ疑惑スル所ナク千般ノ治方自ラ明決スベシ凡ソ志ヲ濟生  
ニ用ルモノハ日夜手ヲ  
解ベカラザルモノナリ

扶氏經驗遺訓

同 譯

全部廿五冊

扶歇蘭度ハ當時西洋諸國ニ卓絶タル名醫ニ著書頗ル夥シク中ニ就テ此經驗  
遺訓ハ最モ單思潛心メ齡八十歳ニ迄ルマテ實測ニ原ヒテ研討折衷シ而シ初テ  
梓行セリ故ニ彼内科書中未タ此ノ如キ確切ノモノアラズ凡ソ濟生ニ從事  
スルノ徒ハ漢蘭ヲ問ハズ日用必ズ須臾モ座右ヲカクベカラザルモノナリ



遠西名醫 察病龜鑑 青木浩齋先生譯 全部三冊

扶歌蘭度 此書ハ診察法ヲ懇論セル者ニ扶歌蘭度君ノ著ナリ彼經驗遺訓ト同ク一生ノ實測ヲ積ミ八十歳ニ至テ初テ上梓シ經驗遺訓ノ卷頭ニ附シ一帙ト故メ世ニ同行セシム其論ノ精詳明確實ニ診家ノ龜鑑醫人ノ寶玉ト謂フ

泰西名醫彙講 箕作阮甫先生纂述 既刻八冊

西洋諸國ノ諸名醫輩各々痼疾ヲ救ハント欲メ日夜焦心割苦シ而遂ニ大發明ヲ致セル名方奇藥多シ故ニ亦之ヲ纂輯セル叢書少カラズ今其中ヨリ奇偉特拔日用ニ最切ナル者ヲ抄譯集録メ濟世ノ裨益ニ供ス医家百方無驗ノ痼疾ニ遇フキ此書ヲ探索メ其裨益ヲカラバ偉勲神績ヲイタサニ了必セリ

内服同功 空洞石阪先生閱 山田寛輯録 初篇全二冊既刻 二篇

此書ハ外用劑ヲ以テ小兒及ビ大患人等内服藥ヲ惡ム者ニ施テ其効内服藥ト相伯仲スルノ良方ヲ輯録セル書也

西洋算籌用法略解 空洞石阪先生口授 男逸筆記 懷中本全一冊

附算籌合刻篋入

窮理格致問答箕作先生校正 初編二冊既刻 二編上一冊并 圖一帖既刻 二編中二冊既刻 二編下二冊

原書ハ乏クシテ且ツ價貴シ偶奇書珍本アリト雖モ容易ニ机上ニ置キガタシ此ヲ以テ先生為ニ此書ヲ翻刻セシメ生徒ヲシテ學ヒヤスカラシム此書ヤ窮理ノ入學ニシテ自問自答ニ説キ其上圖ヲ描キ丁寧反覆ノコトス處ナシ實ニ儒門ノ大學ト謂フべし殊ニ文法モ正シケレバ和蘭文典ト共ニ必讀スベキ書ハ之レニ勝ルハナシ

瓦鸞麻 譯和蘭文語 大庭雪齋先生譯 初編二冊既刻 自大序至數字自代譯至問緯

和蘭文語ニ邦語ヲ對譯シ又注解ヲ加ヘテ明詳ナレハ苟モ初學ノ徒此書ヲ熟讀スルトキハ他書ニ對シ文理判然トノ疑惑ナカルベシ實ニ蘭學入門必讀ノ書ナリ

公氏病學淵源 兒玉順藏先生譯 病證各論部既刻 次編近刻

銃工便覽 折本全一帖

西洋ノ歩兵銃騎兵銃ノ圖ヲ出シ又器具ノ解シテ真形ヲ寫シ名稱ヲ記シ鍛鍊ノ術マデテ丁寧ニ記シタル銃工師傳ヲ受ズル其秘術ヲ知ルベシ又雷粉製作ノ器ヨリ分量迄ヲ記シ陣中早蟻燭ノ製小銃琢法其他細事ニ至ルテヲ明詳ニ載スルハ武術研窮ノ士左右ニ欠ベカラス



刻翻

重學淺說

全一冊

此書ハ西洋人ノ發明セルヲ翻刻ス重學ハ格知日用ノコニシテ奇ニ妙ノ理ヲ  
説キタルモノナリ一々圖ヲ出シテ理解シヤスカラシム夫レ川ヲホリ山ヲウカキ家ヲツク  
リ城ヲキツク等重學ヲ解スルトキハ大石大水ヲ動スニ人カラ勞スルコトナシ故ニ  
士農工商ノ各チナク一讀シテ其益少ナカラズ

七新藥說

佐渡 司馬陵海譯選  
佐倉 関 寛齋校

全三冊

此書ハ和蘭ノ名醫朋百氏ノ書ニ基ツキ其他近來新渡ノ珍書ニ載  
スル處ノ奇術良藥ノ用法并ニ製法マデモ精密ニ遺漏ナク集メテ大成  
スルモノナリ實ニ古來未嘗有ノ新書ニシテ  
西洋醫家珍寶凡案ニ置ベキ書ハ之ニ勝ルハナシ

三都

江戸日本橋通二丁目

須原屋茂兵衛

同 日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

書物

同 淺草茅町二丁目

須原屋伊八

同 横山町三丁目

和泉屋金右衛門

發行

同 堅川三之橋

萬屋兵四郎

京都二條通柳馬場裏

若山屋茂助

大坂心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門



